

## ■手塚治虫と電気科学館（2006）

加藤 賢一

大阪市立科学館 ホームページ スタッフ紹介ページ（2006）より

## ■手塚治虫と電気科学館（2006）

### 1. 概要

大阪市近郊に生まれ育った手塚治虫（1928-1989）。少年期に開館間なしの大阪市立電気科学館（1937年開館）に通いつめた聡明な科学少年であった。大阪大学医学部という難関大学を経て医師となり、医学博士号を取得して本格的に医業に邁進するかに見えたが、漫画家への夢を捨てきれず、ついに転身し、そして漫画・アニメという新しい表現手段の世界で第一人者となった。手塚と電気科学館との関係を概観する。

### 2. 寄稿文、電気科学館 50 周年記念講演会

手塚は電気科学館の要請に応じて、星の友の会機関誌「月刊うちゅう」に思い出の記を寄せてくれた（1985、第2巻、No. 4）。その記事は本誌に再録しているのでご参照いただきたい。

この手稿は1985年であるが、その2年後、1987年には電気科学館開館50周年記念行事があり、手塚治虫を講師に招き、プラネタリウム・ホールで講演会を開催した。

そもそも、1984年頃、イレブンPMという深夜のテレビ番組で、手塚が大阪の思い出の場所を巡るといふ企画があり、電気科学館のプラネタリウムにもやってきたことであった。それまで「手塚さんが昔よく来ていたらしい」という話は聞いていたものの、私たちが彼自身からそれを聞いたのはこの番組が初めてであった。そこで、黒田武彦さん（当時天文スタッフ、現兵庫県立西はりま天文台公園園長、兵庫県立大学教授）が原稿を依頼し、開館記念行事にも引っ張り出したのであった。当時、手塚は多忙を極め、それは世間にもよく知られていたことだったので、随分遠慮していたのだが、電気科学館の閉館も予想されていたので、この機会を逃しては二度とチャンスはないということで、黒田さんが大変な奮闘をされ、館首脳を説得してようやく実現に漕ぎ着けたのであった。

この手塚の文章から、私たちは「プラネタリウム」なるお菓子があったことを知るに至った（註1）。しかし、さて、今はどうなっているか、残念ながら知るす

べがなかった。それがひょんなことからわかり、新聞掲載までされることになった話は次節に譲る。

講演会は大盛況であった。手塚ファンが駆けつけたのはもちろん、作家で作詞家の石浜恒夫さん（1923-2004）がお嬢さんの紅子さんを伴って来てくれたのは殊に嬉しかった。石浜さんは「月刊うちゅう」（1985年5月号）に素晴らしい紀行文を寄せてくださっており、さすがに作家と思わせるその文章に僕はしびれていたからであった。石浜さんはフランク永井の歌った大阪ロマンやアイ・ジョージのガラスのジョニーなどを作詞していたことで僕らの世代には知られていた方だった。当然、手塚をよく知っていたはずである。

### 3. 大阪銘菓『プラネタリウム』

当時、電気科学館の事務を手伝ってくれている丸顔の青年がいた。時々、手の足りないときなどにアルバイトをお願いすることがあったが、彼はそんな臨時的な仕事を手伝ってくれていた。「月刊うちゅう」に手塚の文章が掲載され、たまたま事務所でそんな話をしていたら、その彼がお菓子「プラネタリウム」を知っているという。どういうわけかを尋ねたら、それを家で作っていると言う。これに一同びっくり！ 何たる偶然か！ しかし、偶然と思ったのは私たちの間違いで、彼は家業が電気科学館に関係していたことを知っていて勤める気になったのであった。本当の偶然は、その彼が勤めていた時期が手塚の原稿と重なったことであった。

こうして、その千成一茶の大原時子さんから、私たちに幻の銘菓「プラネタリウム」を頂戴し、1985年12月頃、友の会会員一同と共にお茶会をすることになった。この模様は某新聞社が伝えるところとなり、手塚や昔のプラネタリウム談義に花が咲いたのであった。

こうして銘菓「プラネタリウム」の歴史もわかって下記の1985年11月の「月刊うちゅう」の記事となった（執筆は黒田武彦さん）。

## 大阪銘菓

### 『プラネタリアム』について

#### 編集部

「うちゅう」7月号のこの欄は漫画家の手塚治虫さんに登場願いましたが、その中で手塚さんがプラネタリアムを見に来るたびに買い求めていた『プラネタリアム』という菓子についてふれておられました。『やや長めのクッキーに、銀の砂糖粒を散らしてある。それがつまり星空というわけだった。ちよいと工夫をこらした何の変哲もない菓子』だったということです。この菓子は昭和14年から約2年簡、大原菓子研究所で製造されたフィンガービスケットであることがわかりました。『プラネタリアム』という名称は登録商標となっており、昭和16年には(株)三星社、昭和26年9月26日からは千成一茶と社名は変わりましたが、実は『プラネタリアム』という名の菓子はまんじゅうに形を変えて生きていたのです。

大阪市都島区都島本通 2-11-11 (TEL 6922-2010) の

千成一茶本舗だけでしか販売されていませんが「宇宙時代の味」というふれこみ、なぜか心がときめきます。

この銘菓『プラネタリアム』については「月刊大阪人」2006年1月号に詳しい紹介があり、当主大原時子さんが手塚との思い出などを寄せておられる。

なお、手塚と「プラネタリアム」、淀屋橋にある石原時計店社長・石原実さんのこと（手塚の手記を参照）などは下記のウェブページが詳しい。一度ご覧いただきたい。

<http://www2.ocn.ne.jp/~norimi/>

註1:その後、高城武夫著「プラネタリアムの話」(1954年、本書で紹介)の58ページに「見学みやげにプラネタリアム絵はがき、大阪名勝名物“プラネタリアム”と銘うった栗おこしやケーキもあったり、“星座”と呼ぶお菓子も売られています」という記述を見つけた。